
僕とサトシの。

のりまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕とサトシの。

【Nコード】
N5299G

【作者名】
のりまき

【あらすじ】
僕とサトシの奇妙な関係を書いてみました。

ガラス越しに見るサトシは、頬骨が出るほど痩せこけていた。

幾つかの肉刺^{まめ}ができた僕の手とサトシの細長い手を添い合わせ、不安と安堵の複雑に交じり合った真逆の感情を表に出す。

一緒に生まれてきたはずなのに、どうしてこんなにも違うのだろうか。

外見は似ていても、こんなにも違うんだ。

ガラスから手を離し、僕は野球帽を深く被りつけた。ベンチに入れないけど、応援してくれるサトシの為に、僕は諦めるわけにはいかない。

今となつては、応援してくれるのはサトシだけになってしまった。両親は消えてしまった。だからこそ、僕は諦めるわけにはいかないんだ。

「それじゃあ。行ってくるよ」

壁に掛けてあるバットを手に持ち、サトシに背を向ける。顔なんて見えなくても、僕にはわかる。サトシがどんな顔をして僕を見送っているか。そして、サトシの後ろにいる“アレ”も偽りじゃない、ということも。

わかっていても、やめてくれ、なんて言えないよね。

結局、今日も一人寂しく素振りだ。人一倍ひ弱な僕は、ボールも上手く投げれないし、そんなヒョロヒョロの球なんて誰も捕ってくれりゃしない。それでも、こうして素振りができるだけサトシよりずっとマシなんだ。

体がよろけるほどまで素振りを続けていると、不意に手の平に激痛が迸った。

「ははっ、サトシみたいだ」

潰れた肉刺に息を吹きかけながら、その手に言葉を零した。シワシワにふやけた細長い手は、本当にサトシのそれみたいだった。

こんなところで感じるのもどうかと思うけど、やっぱり僕たちは似ているんだ。

何もできないサトシと、ヒョロヒョロの球しか投げれない僕。それでも、バットを振れるのは僕だけなんだ。

ほんの些細な自覚ではあるけれど、最近バットの勢いが増したようない気がする。

快音は聞こえないかもしれない。でも、あのガラスを割ることはできそうだ。

「ただいま、サトシ」

バットを壁に掛けた僕と同じように、ガラスに手を当て、帰ってきた僕に口角だけを上げるサトシ。目が祝福をかたどっていない。

ガラス越しでもしっかり伝わってくる体温が、僕とサトシの距離を感じさせる。親近感なんて、存在しないよ。

そして、視線をずらすと見えてくる、サトシの後ろにある“アレ”。

僕が“アレ”を見ると、みんな消えていくんだ。まるで、サトシの人生を吸収していくかのように備わった、僕の“ちから”。“アレ”が見えてしまったから、両親も消えてしまったんだ。

それでも、やめてくれ、なんて言えないよね。

「……」

声を出したのは僕なのだろうか。それとも、サトシなのだろうか。どちらにしても同じだ。

僕はすでにバットをつかんでしまったのだから。

打席に立つときも、こんな感じなんだろうか。立ったことがないからわからないや。緊張、興奮、不安、希望。どれが一番勝るのかな。

バットの一部分に視線を置く。赤くなっているのは肉刺が潰れたせいではない。それは、サトシにもわかってのことだ。

深呼吸をしサトシの方を向くと、二つの視線が重なり合った。

サトシの瞳に映っているのは、既知。そうさ。僕の“ちから”は“アレ”が見えてしまうことなんかじゃないんだ。

“アレ”を見たいから見れる。

それが僕の“ちから”。

だって、両親には消えて欲しかったんだもん。

だから、やめてくれ、なんて言えないよね。

僕の目の前にいるのはサトシだけ。誰も、僕にボールを投げてくれる人なんていない。それでも、僕はバットを振らなければいけない。その為の素振りだったんだから。

後のない、最初で最後の一球勝負。勝っても負けても、終わりだ。

それは、今まで素振りをしてきた中で一番美しいフォームだった。

それは、今まで素振りをしてきた中で一番勢いのあるスウィングだった。

なぜ僕は、ヒョロヒョロの球しか投げられなかったんだろう。

なぜ誰も、僕の球を捕ってくれなかったんだろう。

不意に頭に過ぎった疑問をサトシに投げかけても、サトシは何も答えてくれない。何もできないサトシは、やっぱり何も答えてくれ

ないんだ。

もし、サトシが僕に同じ疑問を投げかけてきたとしても、やっぱり僕にも答えられないだろう。僕とサトシは同じなんだ。

だから、僕はサトシの後ろに“アレ”を浮かべたんだ。

サトシの“死相”。

つまり

僕の“死相”。

やめてくれ、なんて言えないよね。

【完】

（後書き）

不思議だったり、奇妙だったり、何かを感じ取ってくだされば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5299g/>

僕とサトシの。

2011年1月6日14時52分発行